

「ぬれぎぬ」考

中 井 和 子

「ぬれぎぬ」をよみこんだ歌は、勅撰集としては、後撰集にもっとも多く、古今、拾遺がこれにつぐ。作者は、伊勢、貫之が多く、更には、友則、忠岑、好古、朝忠、朝綱、和泉式部等の人々である。又、古今六帖には「ぬれぎぬ」の項があり、歌数もここにもっとも多い。歌集以外のものとしては、伊勢物語、大和物語、蜻蛉日記、源氏物語、大鏡の歌に出る。

これらの分布状態でおおよそわかる事は、「ぬれぎぬ」は、古今集成立をややさかのぼる時代から、後撰を経、源氏物語に至る間、即ち王朝の後宮サロンの勃興期から最盛期にかけての時代に、用いられ、その間に定着し、成立した歌言葉であろうという事である。その成立過程と、歌言葉としての意味について考えてみたい。

万葉集卷九、名木河作歌

1688 あぶり干す人もあれやも沾衣を家にはやらな旅のしるしに

この歌の「沾衣」の意は、旅に出て風雨に濡れた衣の意である。その

「ぬれぎぬ」考

他に、何の意味も附加する事は出来ない。しかし、万葉集以後の歌集にあらわれるぬれぎぬに対しては、諸註釈書は「なき名也」或は「事実無根の事也」と説く。今日我々は、無実の罪をきる事を、ぬれぎぬをきるという。単なる「濡れた衣」が、「なき名」に転じ、更に「無実の罪」の意にどうして転じたのであろうか。

最初に、「ぬれぎぬ」についての諸説をあげる。

八雲御抄には「ぬれ絹 なき名也、有因縁」とある。倚語抄、色葉和歌集には、「なき名也」或は「なき名を立つ」とあって、それぞれ古今集1117番の歌を引く。奥義抄には、古今集402番の歌「かきくらしことはふらなむ春さめにぬれぎぬきせて君をとどめむ」の註として「是は雨いたくふりて物へいきつることはそらごとに成なむずれば、ぬれ衣きせてとはよめり、雨にぬれぎぬともそへたる也」とある。秋成のよしやあしやには、「此事、為家卿の後撰集の抄を引て、いつはりを濡衣と云ふ事、昔は、譌とまことを正さんため、天の迦ぐ山におのおのが衣をぬらして、神楽

して神に奏するに、いつはらぬ人のきぬはただに干る。亦、いつはれる人のは乾かずと。是によりて、いつはりを濡ぎぬといひ伝ふと、或人のいへり。此事、古めいたる説なれど、何てふ古書にも出たりともしるされず。」倭訓栞には「菅方に置白露を潤衣にきてと見えたり、なき名たつをぬれぎぬきるとふるくいひ習へり、継母のままむすめになき名をおほせて蟻のぬれぎぬをかつけし事也といへり、按するに日本紀に濡をかづつとよみ今もなき名をおほするをかつけるといへり、さればかつつ海人は皆ぬれぎぬきたれば、汚名を被ふるなといふ意に海人のかつきよせてぬれぎぬとはいひひろめたる成へし、故事にはあらじ……」とあつて、秋成との同説もあわせのせている。海録には、「人の科を負ふは、蓑なくして雨に衣の濡るるを実のなきにかけて、無実なる意のなぞなりといふ」と。

これらの説によつてうかがえる事は、歌学の時代にはぬれぎぬは、「なき名たつ事」と考えられていた事、——但し、ぬれぎぬとなき名との関連については、八雲御抄に「有因縁」と伝えるのみである——。江戸時代には、ぬれぎぬは歌学における解をこえ、「事実無根の事」に転化した事、その為にもとの言葉とのへだたりはますます大きくなつたという事である。よしやあしや以下に引用される、まことしやかな諸説の成立は、もとの意味との間隙を意識し、それを埋めようとした人々の努力を物語るものであらう。

これらの諸説のうち、倭訓栞が「故事にはあらず」としりぞけたもの、継母と継女のご事だけは、ぬれぎぬ↓なき名↓無実の事、の過程を如実に語ってくれると思う。即ち、継母は、継女になき名をおわせる為、④

海人のきている濡衣を継女にさせた。④濡れた衣をきている事は、男にあった事を意味し、⑤濡衣をきた継女にはあだ名がたつ ⑥しかしそれは継母の計略であつて、本当はなき名である。このようにして、広く、無実の者が罪をきる事を、ぬれぎぬをきる、というようになる。この故事の中には、これまでぬれぎぬの解としてあらわれた、なき名、無実の事の両者も当然含まれる事になる。

この継母と継女のご事を手がかりとして、ぬれぎぬ成立の過程を考えると次のようになる。

(1) 濡れた衣

- ① 濡れた衣 (海人の濡衣、その他)
- ② 恋における濡れた衣

(2) 事実無根の事

- ③ 恋における事実無根
- ④ 広く事実無根の事

ぬれぎぬが、(1)の①にとどまるかぎり、(1)から(2)への転化はない。(1)の②に用いられてはじめてそれは、(2)に転化する。(2)における③④は、その外延がひろがっただけの事である。

一、恋のぬれぎぬ

(1)の①については、さきにあげた万葉集¹⁶⁸⁸ 1688 番の歌、その他に、夫木抄雑九にのる「鶴のいるかたにぞありける白妙のあまのぬれぎぬほすかと思へば 躬恒」等があるが用例も少い。単純なぬれぎぬであるので、問題はなと思う。まず「恋のぬれぎぬ」(1)の②から考えて行きたい。

伊勢物語、61段、

昔、おとこ、筑紫までいきたりけるに、これは色好むといふすき物とすだれのうちなる人のいひけるをききて

染河をわたらむ人のいかでかは色になるてふ事のなからむ

女、返し

○名にしおはばあだにぞあるべきたはれ島波の濡衣、きるといふなり

○解、「たはれ」という名を負うているたはれ島は、いつも波の濡衣

〈寝間の濡衣〉をきて、多情であるという事だ。

この61段の濡衣の歌に対して古来さまざまの註解がなされているが、右のように「恋の濡衣をきて多情である」と解釈したものは見当たらない。それらの説の大略は、

① タワレ島ハ（タワレデナイノニ）、ソノ名ノ為ニ、タワレトイフ無
実ノ名ヲオウテイルトイフ事ダ（拾穂抄、日本古典文学大系等の現代の
大方の註釈書）

② タワレ島ハソノ名ノ通りタワレデアルノニ、ソレハ事実無根ダトイ
ツテ、タワレデアル事ヲゴマカシテイル（古意）

③ タワレ島ハ（タワレデナイノニ）、人々ガ波ノヌレギヌヲキセテ、
タワレトイフ罪ヲオウセタノダ（勢語憶断）

④ タワレ島ハタワレデアルカラ、濡レタ白絹（波ヲ白絹トイフ）ヲキ
テイルト思ツタラ、ソレハ波デアツタ。（タワレ島ハ名ノトオリデ
ハナカッタ）（關齡抄）

右の四つの解のうち、①③④は、たはれ島は、たはれでないとしてい
る。たはれ島は、たはれでないのであろうか。

和歌初学抄に、「相模 たはれ島 アダナルコトニ」とある。（この場
所の相模については、奥義抄に『相模 あはれ島』とあり、八雲御抄に『たはれ
島 肥後 後 朝綱、清輔抄、相模』とある故、あはれ島と混同して、相模になっ

「ぬれぎぬ」考

たものらしい）初学抄の註によれば、たはれ島は、名の通りアダナルモ
ノとして取扱われたらしいのである。大体、我国古来の考え方は、名は
性をあらわす、というより、そのような性があればこそ、そのような名
がついた、という考え方である。都鳥は都の事を熟知し、逢坂の関は、
恋しい人に相逢える関である。そして、歌はこのような名をめぐって構
成される事が多い。61段も亦、その一つであろうと思われる。

昔男が女をたづねて筑紫まで出かけたところ、女から「あなたは評判
のいろこのむといふすき物」といわれた。それで男は、人の心を色に染
めるといふ染河を渡って（あなたを思う色にそまって）きたのですから、色
にもなろうというものです、といった。例のたはれ島の歌は、この時の
女の返事である。女は男に「色好むといふ好物」という名を与えた。男
は、それは染河に染ったせみであると答えた。すると女は、「たはれと
いう名のたはれ島は、いつもたはれて波の濡衣〈寝間の濡衣〉をきてい
る」と答えた。名にし負う「たはれ島」は、その名の通りいつも恋の濡
衣をきて多情である。名にし負う「色好むといふ好物」は、その名の通
り色好みである、という事である。かくして、男の否定はたちまち逆襲
されてしまったのである。

真淵の古意は、たはれ島はたはれである、としているが、「波の濡衣
きるといふなり」を、「そは、波の濡衣なめりといひなすが、ごとき也」
として、最後の一句の解を異にしている。この解によると「たはれ島は、
『濡衣なり』といひなす」か「あなた（相手の男）は、たはれ島を、『濡
衣なり』といひなす」かの何れかであって「いふなり」の主語は、たは
れ島もしくは相手の男という事になる。しかし「……といふなり」は

「……という事だ」ととらなければならぬ。例えば古今集雜、

917 住吉とあまはつぐともながゐすな人わすれ草おふといふなり

983 わがいほは宮このたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

真淵が、「いふなり」をこのように解釈したのは、濡衣を無実の名の事とする一方、たはれ島をたはれであるとする事によって男の色好みも亦肯定しようとしたためである。それは、苦心の結果ではあるが、濡衣を恋の濡衣と解すれば問題は解消すると思う。

後撰集に次のような歌がある

たはれ島をみて よみ人しらず

1352 名にしおはばあだにぞ思ふたはれ島波の濡衣、いく世きつらむ (一本

「いくゑきぬらむ」)

「たはれ」という名を負うたたはれ島は、一体幾世代へそして何人もの相手へにわたって、あだな恋の濡衣を着つけてきたのだらう。余程長い間あだな恋の濡衣を着つけてきたからそんな名がついたに違いない。

↑たはれなるものはあだな恋の濡衣をきている。伊勢物語61段は、この歌をふまえているのではなからうか。真淵は古意において「右二首(染河とたはれ島の歌)ともにことなる歌なるをここに詞をかきて贈答とせし事は巧みに出きたる也」とかいている。染河の歌については、拾遺集1234番に「題しらず 在原業平朝臣」として、同様のものがのっている。伊勢物語成立以前に、これら二つの歌が流布しており(一つは明らかに業平の歌として伝わっていたのかもしれない)、伊勢の作者は、この二つを合わせて61段を構成した。その為、たはれ島の歌を「……あるべき……さるといふなり」と伝聞形式にかえたのである。このような想像は許されな

いであろうか。

類歌として、古今集、(元永本、関戸本のみ)

1117 をみなへしなき名やたてししらすつゆのぬれぎぬをのみきてわたるらむ

続千載集

題しらず 大式三位

747 乱れたる名をのみぞ立つ苜萱のおく白露をぬれ衣にして

伊勢物語のこの段は、後謡曲に入り、謡曲「濡衣」をつくったといわれる。現在では廢曲になつているので委しい筋はわからないが、それは、昔男の業平と歌をよみかわした染河の女の亡霊が、旅の僧に昔話をする筋(大辞典による)だそうである。このあらましから察すると、それは、無実の罪の物語ではなく、恋の物語であると思う。謡曲には、しらずしらずのうちに、正しいよみとり方がはいたのであろうか。

その他の恋のぬれぎぬの歌

① 濡衣と人にいわずな菊の露齡のふとぞ我そぼちつ

(六帖卷一長月、貫之。卷五ぬれぎぬ、よみ人しらず。)

② 折菊の雫を多みわかゆてふ濡衣をこそ老の身にきれ

(六帖卷一長月、忠岑。卷一平、躬恒。貫之集『九月九日、忠岑がもとに』。忠岑集『菊の花の露に袖を濡してあるじにかくいふ』。)

① 自分は長寿を祈るため、菊の露のしとどにおいた菊綿をきて、濡れているのである——ここまでは、作者は、万葉の歌のような、単純な濡衣を着ているのである——「濡衣と人にはすな」、これをもって、濡衣は恋の濡衣である事がわかる。菊の濡衣といわれるのなら、人に噂されても困

らない。しかし濡衣をきていれば、人はあだ事へたはれの結果と
のである。②は、単純な濡衣であるが、「老の身にきれ」といつたこ
ろに、既にたはれの意がある。恋と老の身、その不釣合なものの対象で
ある。この歌には、「かへし」の歌があり（露深き菊をし折れる心あらば千
世のあだ名は立たむとぞ思ふ 六帖巻一長月、『貫之集』貫之集では貫之の
歌のかへしとして）、あわせて考えると、あだ事へたはれ〳〵の意はな
かである。「露深き菊をし折れる心」、それは「菊綿をきて長生きしよう
という若やいだ心」であり、「濡衣をきよう、即ち恋をしようの心」で
あり、「花へ女〳〵を折ろうの心」である。そんなお心のあるかぎり、ま
だまだ恋のあだ名は立ちますよ。濡衣と恋は、かへしの歌で完全に結び
ついている。

① とひ絞る人もなき身の濡衣は天の下にぞ降てきせける

（六帖巻五ぬれぎぬ）

② 世とともに我濡衣となるものは侘る涙のきするなるべし

（六帖巻五ぬれぎぬ 伊勢集『なき事を人の云ひしころ』）

① たはれて恋の濡衣をきる、その恋の濡衣を「問ひ絞る人」も自分
はない、それ程老いたというのであろう。こんな自分のきている濡衣と
いっては、「天の下にぞ降てへ古りて〳〵きせけるもの、雨だけ。恋の濡
衣と、あめの濡衣の類似と対象の歌である。②伊勢集には詞がきがあり、
それによるとなき名に対する弁解の歌である。意味は、①の雨が涙にか
わっただけである。人は私をあだな恋の濡衣をきていると噂する。けれ
ども、私のきている濡衣は、あなたに捨てられて泣きわびているその涙
の濡衣です。恋の濡衣を、それは無実のなき名である、と否定している

「ぬれぎぬ」考

のであるが、この歌の中のぬれぎぬには、まだなき名の意はない。それ
は、涙と恋の類似と対象のみである。

恋による「ぬれぎぬ」を、濡れという言葉にまで拡大するならば、そ
れは時期もさかのぼり得るし、量も多い。

① わぎ妹子にふるとはなしにありそみにわが衣手はぬれにけるかも

（万葉集巻二一、3163番）

稲かりほせる

② 朝露のおくての稲は稲妻をこふと濡れてや乾かざるらむ

（貫之集巻四）

③ 濡れかへりせかれぬ水脈にひかれてぞ我さへうきて流れよりけむ

（伊勢集 平中物語二段）

④ 濡れわたる水の下にもいかなれば恋てふいをの絶えずすむらむ

（朝忠集）

題しらず 橘 敏仲

⑤ 侘人のそぼつてふなる涙川おりたちてこそぬれ渡りけれ

（後撰集恋
二、611番）

恋の「濡れ」を、露であらわした歌も多い。

もろともに住む女に

① 日は照るに我衣手の乾かぬは一夜の露をいかに置しぞ

（源 重之集）
くにもちが音もせざりければ遣はしける 本院右京

② ともかくもいふ言の葉のみえぬかないづらは露のかかりどころは

（後撰集恋二、610番）

露は、「露の命」のようににはかない事の代名詞として、又涙の比喻とし

て用いられるが、右の歌のように、恋の「濡れ」の比喩としても用いられている。露は本来草葉や花におくものである。それだけに、自然現象に託して、事柄は甚だ露骨である。①は、朝になり日が上っても、昨夜の濡れは一こうに乾かない。たった一夜の露なのに、露はどんなおき方〈濡れ方〉をしたのであろうか。「一夜の露」は、一夜の恋の濡れの比喩である。②は、言の葉の縁として露を出した。あなたはこの頃少しもお出でになりませぬが、一体どこのどの葉へ女に、露はかかっているのでしょうか。又元輔集に

心変れる女につかはす人にかはりて

契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山浪こさじとは

この「かたみに袖をしぼりつつ」も、恋の濡れをいつているのである。お互に涙で濡れた袖をしぼりあうのはおかしな事である。そして、その涙の濡れでさえ、相手の女へ男からは、ある場合には、よその女と濡れた恋の濡れとして受けとられるのである。

男 はるばると見ゆる海辺を眺むれば涙ぞ袖の潮とみちける

女 渚なる袖まで潮はみちくともあし火たく屋しあれば干ぬらむ

(平中物語35段)

更に江戸時代に下ると、恋の濡れは、俳諧、草双紙、歌謡と使用範囲もひろまり、又多くの熟語をつくる。好色文化のさかえた江戸時代にはかつこうな表現であったと思われる。例えば

顔と顔をよせてしつぼりぬれの露(重帷子)

叶はぬ濡れに身を浸し、広いさつまを狭められ(薩摩歌、宝永)

その他、「濡れの文」「濡れの道」「濡れのやりくり」「濡れ場」「濡

事師」「濡れ幕」「濡れ身」等と、濡れは、好色行為のいわば別名として用いられている。それにもかかわらず、ぬれぎぬだけは恋の意からたちきられ、無実の罪の意とされるのである。ぬれぎぬをよみこんだ古人の歌や物語の解釈も、ぬれぎぬは、無実の事として解せられるに至るのである。

恐らくはそこでは、「濡れ」という事柄そのものが、すでに具体的生理的な場を捨てて、抽象化され観念化され内実において稀薄なただの形容語になり果てたのである。それ故に、すでに転意の傾向にあったぬれぎぬは、なおの事その出所から離れ切ってしまったのである。

例えば江戸時代には、恋の場には手の冷たい事がふさわしい事とされ、歌舞伎の女形は恋の場には、冷水に手をひたして出場したといわれる。手が冷たいという事は生理学的には、蒼白な顔面、乾いてキラキラ輝く瞳、はやがねのような胸の鼓動、という症状と同和的であり、そして、その際の汗は交感神経の亢進による「量の少ない粘稠な汗」である事が、特に神経生理学の教えるところである。

万葉や平安の時代には、「濡れる」とは文字通り生理的に濡れる事を意味していた。しかもその濡れは決して冷汗に類する汗ではなく、副交感神経の亢進に由来するといわれる「薄くて多量の汗」によるものであったろう。源氏物語には次のような描写がある。

○紫上の新枕

御衾を引きやり給へれば汗におしひたして額髪もいたう濡れ給へり

(葵)

○空蟬

流るるまで汗になりていとなやましげなる（帚木）

神経生理学でいわれる「神経作用頭端移動の法則」と現在の定説である「統合説」とから類推して「進化」の度合が進むにつれて、他の事柄を含めて右のような副交感神経に由来する生理が、或は忘れ去られ、或は歪曲され或は観念化されてゆく、という事がいえよう。

「ぬれぎぬ」がすでに転意をなしとげた形で現在に伝えられ、その原意が忘れ去られたまま当時の歌の中に埋もれているという事、ぬれぎぬがいわばぬれぎぬを着せられたままになつていくという事は、ある意味では当然の事かもしれない。

次にみて行くのは、濡衣が濡衣を着せられてゆく経路である。

二、ぬれぎぬとあだ名となき名

恋の濡衣が、何故なき名に転意したか、という事。

(1) 自分の恋の濡衣を他に転化するへ着せる

恋をして濡れた恋人たちは、自分たちの恋の濡衣を、何とか他人の目にかくそうとつとめる。それには恋で濡れた濡衣を、自然現象（雨、露、波、涙等）のために濡れた濡衣である、といいつくろうのが一番いい。恋人たちは、自分たちのあだ事の露頭をふせぐ為に苦しい智慧を働かせる。古今集の次の歌はそういう時の歌である。

題しらず 読人しらず

402 かきくらしことはふらなむ春雨に濡衣きせて君をとどめむ

女のところに男は通ってきた。しかし、折角通ってきた男は、あだ事の露頭をおそれ、女の家に落付かない。二人が恋の濡衣をきたらあだ事はたちまち露頭するからである。丁度その時、春雨がふつてきた。「同じ

降るなら春雨よ、もつと降つておくれ。そしたら、私たちの恋の濡衣をそっくりお前にきせてへ恋の濡衣は、春雨で濡れた濡衣だ、という事にして、あの人をもつと長くとどめましようから——。

かくして春雨は、事實は、恋の濡衣をきて濡れているのではないのに、へ恋の濡衣を着せられる事になる。即ち恋の実はないのに、恋のあだ名を立てられる事になる。このようにして、ぬれぎぬは、実なきあだ名へなき名と結びつくのである。この時の雨が、五月雨や野分の豪雨ではなく、春雨である事も注意を要すると思う。そのような雨ははげしすぎるので、恋の濡衣へあだ名として、濡衣へなき名をきせるわけにはいかない。恋はしつぽり濡れるものである。

後撰集にのる次の貫之の歌も亦、花に託してはいるが、恋人たちが恋の濡衣を他に転化させるへ着せる、その同じすぢみちを歌によんだものである。

花のもとにてかれこれ程もなくちるてふ事など申したるついでに
98 春くればさくてふ事を濡衣にきするばかりの花にぞありける

花を惜しむの余り、春がきて花が咲いたのがわるいのだと、罪もない春に濡衣をきせたくなる、そんな花である事だ。表の意味は、花の事であるが、作者は男女の恋の事を考えている。そうでないと、濡衣は生きてこない。女と恋に濡れた男は、他（女の女親でもよい）から咎められた。

その時男は「春がくれば、花が咲き、やがて散る。散るのは花がわるいのだろうか。それは春がきた事がわるいのだ。それと同じように、春へ時」がくれば、女は花ひらき、やがて散るへ男を知る、それは男や女がわるいのではない、春になった事がわるいのである」と——。男と

女の恋の濡衣は、春へ時への到来に着せられてしまった。春は何の恋の実なくして、恋の濡衣へあだ名を着せられたのである。

(2) 濡衣へあだ名を他から着せられる

自分が他(春雨、春、……)に着せた恋の濡衣へあだ名は、やがて自分の上にはねかえってくる。恋の濡衣をきていなくともへ恋の実がなくとも、濡れてさえおればへあやしくさえあれば、恋の濡衣をきている、とあだ名を立てられるようになる。(一)で引用した六帖にのる貫之の歌は、この事情をよく説明してくれるものである。

濡衣と人はいはず菊の露齡のぶとぞ我そぼちつつ

作者は菊の露を着ているのであって、恋の濡衣をきているのではない。しかし、菊の露で濡れていてもへ恋の実がなくとも、濡れておれば、他からは、恋の濡衣をきていると、あだ名が立つ。

かくして濡衣をさせられた恋人たちは、濡衣へあだ名を嘆かなければならない。

① ぬれぎぬを干すた鹿の声きけばいつかひよとぞなき渡りける

(六帖卷二鹿、友則)

② 君により蟹の濡衣我きたり思ひにほせどひる由もなし

(六帖卷五ぬれぎぬ)

あだ名立ちていひ騒がれける頃ある男ほのかにききてあはれいかにぞととひ侍りければ 小町がうまご

③ うき事を忍ぶるあめの下にしてわが濡衣はほせど乾かず

(後撰集雜四、126番。小町集)

右三首は、ともに、他のきせた濡衣へあだ名を、実なきものを実あ

りとする、なき名であるとして嘆いているのである。更に次の二首になると、その濡衣へなき名をさえ歓迎している。

① 猶きたれ蟹の濡衣我ほさむよそふる人のにくからなくに (六帖卷五ぬれぎぬ)

ぬれぎぬ)

② にくからぬ人のきすなる濡衣はいとひかたくも思ほゆるかな (六帖卷五ぬれぎぬ)

① 私には、あなたと恋の濡衣をきている、というあだ名が立っています、それは他によって着せられた濡衣へなき名ではありますが、あなたとの濡衣なら、よろこんで干しましょう、やはり、お出でになって下さい。②あの人との恋の濡衣を着ているとあだ名が立つのでしたら、それが噂だけの、なき名であっても、うれしい事です。これは、源氏物語の、源内侍のような場合である。

(3) 恋の濡衣へあだ名をぬれぎぬへなき名と弁解する。

恋の濡衣を他に着せたり(1)、他から着せられたり(2)、しているうちに、実なきものが実ありとしてあだ名を着せられる事へなき名たつ事と、濡衣をきる事は、いつしか重なり合う。実なきものに着せたり着せられたりする具体的な行為を通して、実なきものに名を着せるといふ、抽象語へなき名に、ぬれぎぬは転化する。

こと女に物いふとききてもとのめの内侍のふすべ侍りければ

好古朝臣

① めもみえず涙の雨のしぐるれば身の濡衣はひる由もなし

かへし

中将内侍

にくからぬ人のきせけむ濡衣は思ひにあへず今乾きなむ (後撰集恋

女のあだなりといひければ 朝綱朝臣

② まめなれどあだ名は立ちぬたはれ島よる白浪を濡衣にきて

① 私はあなたのきせたあだ名に泣いて濡衣へなき名をきる事になりました。その濡衣へなき名は、こぼれる涙に濡れて乾きそうにありません。② あなたは、私の事をあだなりとおっしゃるが、私はまめなのです。あなたによって私は濡衣へなき名をきせられています。

このようにぬれぎぬは、なき名と同義語となり、実なき事を実ありとする抽象語として用いられるのではあるが、そのなき名のなきの有無は現実の使用にあつては、殆んど問題にされない。このような転化をとげたぬれぎぬといえども、そのもとの恋の意がなおひびくせむかもしれない。それは、他からきせられたあだ名に対する、あだ人の弁解の言葉として用いられる。私のきている濡衣は、恋の実なき私に他がきせたものである、私は他からきせられた濡衣をきている、とそれは、常に受身形でうけとめられるあだ人の側からの弁解の言葉として用いられるのである。実なきのなきよりも、きせられるという、被害者意識の方が強く、故に、抗議し弁解するべき相手が必要とする言葉であるといえる。次の和泉式部の二例は、それがあだ事である事へ恋の事実がある事は、詞がき、その他から明らかであり、作者自身もあだ事の事実を認めている。しかし、それはぬれぎぬであると、訴えるのである。

ぬれぎぬをのみきること、今ははらへ捨ててむ、と人にいひて後、いかなる事かありけむ、なほこりずまのわたりなりけり、といひたるに

① 重ねつつ人のきすれば濡衣をいとほしとだに思ひおこせよ

小式部内侍のもとに、二条の前内大臣はじめてまかりぬとききて

ほりかはの右大臣

人しらでねたさもねたしむらさきのねずりの衣うはぎにもせむ

かへし

② ぬれぎぬと人にはいはむむらさきのねずりの衣うはぎなりとも

① 人が幾枚も幾枚も私にきせた濡衣へなき名に、少しは同情して下さい。② たとえ、あなたが、これは私と濡れたねずりの衣だといって、それを上衣になさつても、私はそれを、あなたのきせた濡衣へなき名と、人に申しましょう。

ぬれぎぬが現実の用法の上では恋の実の有無は殆んど問題にされず、あだ人の側の、他に対する弁解の言葉である事、それは、なき名においても亦同様である。とすれば歌学書における「ぬれぎぬ、なき名也」の註は、意味のあるものであったのであろうか。

① 陸奥にありといふなる名とり川なき名とりては苦しかりけり

(古今集恋三、628番『題しらず忠岑』。忠岑集。)

② こりずまに又もなき名の立ちぬべし人にくからぬ世にし住まへば

(古今集恋三、631番『題しらず読人しらず』)

①②は何れも、実なき名ではない。あだ名である。しかし、あだ人たちは、それをなき名と弁解するのである。恐らくぬれぎぬと同様、実なき私がありと、他から名づけられた名、噂された名、というところに重点があるのであろう。他から名づけられる、その評判に、あだ人たちは苦しむのである。

以上のように、恋の濡衣は、(1)(2)を通過し、あだ名の、あだ名に対する弁解の言葉となる。しかし、ある場合の濡衣は、それらの四つの意味の何れかが大きいという事であって、一つの意味に限定して用いられる事は少ない。なき名の同義語として用いられた濡衣といえども、なお、恋の濡衣や(1)(2)の意味を、その言葉の中にひびかせているのである。それは、使用者の立場と、使う場面の変化によって、変化する。例えば、さき程あげた後撰集にのる好古朝臣と女との贈答歌(p.16)は、ぬれぎぬを、男は涙の濡衣にからませつつも、なき名の意に用いているが、それをうけた女は、恋の濡衣とする。あだし女が男にさせた恋の濡衣である。そして男は更に、私の涙の濡衣を、あなたは恋の濡衣という(2)、といい、女は、あなたは恋を涙に転化する(1)、と、いつまでも二人のやりとりはつづき得る。そのように、この言葉が、使う人の立場の相違によって、いかにさまざまの色合いをみせるかを、一場面のうちにくりひろげてみせてくれるのが、源氏物語の夕霧の巻の次の例である。

夕霧……「世の中をむげに思ししらぬにしもあらじを」

落葉宮……我のみやうき世をしれる例にて濡れそふ袖の名を朽すべき夕霧……大方は我が濡衣を著せずとも朽ちにし袖の名をやかくるる

……

浅ましや。事あり顔に分け侍らむ朝露の思はむ所よ

萩原や軒ばの露にそぼちつつ八重たつ霧を分けぞ行くべき

濡衣はなほえ乾させ給はじ……

落葉宮……分け行かむ草葉の露をかごとにて猶濡衣をかけむと思ふ

殿におはせば、女君のかかる濡れをあやしと咎め給ひぬべければ、六条院の東の御殿にまうで給ひぬ。暫し打休み給ひて、御衣ぬぎかへ給ふ。(岩波文庫、p.119~121)①の濡れは、恋の濡れである。大辞典には「濡れそふ袖」の解として「恋人のある上に恋人をつくる事」とあり、この例を出す。湖月抄には「夕霧の事也」とある。柏木との濡れの上に夕霧との濡れを「濡れそふ」のである。②は、夕霧が落葉宮に恋の濡衣をさせないでも、すでに落葉宮の袖は柏木との濡衣で朽ちている、世間はあなたへ落葉宮の事を、すでに恋の濡衣をきた人だと噂しています、今さらあだ名は消えはいたしません、というのである。③恋の濡衣を着もしないで帰ると、ここに来る時、その事へ恋の濡衣あり顔だった露に恥かしい。恥かしい相手が露である事に注意しなければならぬ。④は、③の延長。かえり道は露にそぼつばかり。露はもう何の幸運のきざしでもない。むしろ佗人のそぼつ露である。⑤恋の濡衣へのあてのはずれた夕霧はいう。このまま何事もなく帰りますが、たとえ実事がなくとも、男が朝女のもとを辞せば、世間はある二人は恋の濡衣をきた、と噂します。この濡衣へなき名は、お干しになれますまい。⑥そんな事をおっしゃって、あなたこそその露の濡衣を、恋の濡衣と、私に濡衣へなき名をお着せになるおつもりなのでしょう。⑦女君へ雲居雁に、この露の濡衣を恋の濡衣と濡衣へなき名をさせられぬよう、夕霧は六条院で露の濡衣を脱ぎかえる。

三、事実無根の事

恋の濡衣は、伝承の間に、ぬれぎぬを着せられて、遂に広く無実の意に転化するのであるが、それは、後の用例にまたなければならぬ。歌

の世界には、そのような例は殆んどないのである。

ぬれぎぬをいかがきざらむ世の人は天の下にしすまむかぎりは（拾遺集1215番。『題しらずよみ人しらず』）

あめの降る此の世に住むかぎり誰でも雨の濡衣を着る、誰でも、無実のいいがかりへぬれぎぬの「一つや二つはいわれる事になる。こうとれば、それは広い意味の濡衣へ事実無根の事」となる。しかし、この歌の濡衣は、なき名とも、とり得るし、又生きているかぎり、どうしたって、恋の濡衣をきるへ恋するものです、と恋の濡衣ともとり得る。この歌は、大和物語44段に出、その物語によれば好色坊主のゑしう大徳は、あだ事にばかり身をやつし、山に帰ろうとしない。又もや何事かあり、あだ名がたつ、その時の歌となつてゐる。とすれば、「ぬれぎぬをいかが着ざらむ」と詠んだゑしう大徳の心のうちは複雑である。純粹の無実の恋の濡衣の用法はないといえる。次の歌は、なき名の意の濡衣であろうか。

「あまのはころもといふ題をよみて」ときこえさせ給へりければぬれぎぬにあまの羽衣結びけりかつはもしほのひをしけたねば

（蜻蛉日記）

人たうびたりときくをいみじくあらがふに人しりて言ひののしりて夜ごとなむゆくとききて

濡衣と誓ひし程にあらはれてあまた重ぬるよともきくかな

（清少納言集）

わすられて歎きける人のまたなき名をさへ立ちて侍りけるに遺はさむといひける人にかはりて

俊頼朝臣

「ぬれぎぬ」考

いとどしく朽ちぬる袖に濡衣を引き重ねても歎く頃かな

（新統古今1360番）

拾遺集に菅公の歌として伝える次の歌は、その詞がきからも、無実の意であろうと思われるが、雑恋に入っているのは何故であろうか。他の菅公の流罪の折の歌は、雑に入っているのである。

流され侍りける時

贈太政大臣菅

1216 天の下通るるひとのなればやきてし濡衣干るよしもなし

（大鏡には『天の下乾けるほどのなればや——』）

四、歌言葉としての「ぬれぎぬ」

最後に、ぬれぎぬの歌言葉としての意味である。

最初にふれたように、ぬれぎぬは、その使用時期を、ほぼ醍醐から後一条期の、撰関政治もつともはなやかなりし時代に限る。この時代は、各撰関家は、後宮に女たちをおくり出し、その廻りを才女たちへ女房に囲繞させてはなやかな後宮サロンをつくり、殿上人亦このサロンをめぐって、男女の贈答がさかんに行われた、就中大和物語が端的にその消息を伝える時期である。ぬれぎぬは、この時代の男女の贈答歌における歌言葉として成立したと思われる。

贈答歌は、恋する男女の呼びかけと答えの歌である。男は女に、自らの恋心をうちあけ、相手の心を問う。女はそれに答える。古くは、お互の名を名のりあえばよかった。名を名のりあえば、お互は相手を、自らの男、女と感じ、二人は一つ恋の世界にとけこむ事が出来たのである。

贈答歌の基調は、自らの恋のうちあけ（相手への求愛）とその答えである。どんな風にして自らの恋心をうちあければ、相手の心をもつともとら

える事が出来るか。ここに贈答歌のさまざまな工夫があった。そして、男女の贈答が日常の社交と化した撰閲時代のような時代には、その工夫はつみ重ねられて、相手の心をとらえるのにもっともふさわしい言い廻しや、もっとも適切な歌言葉が生れるのは、当然といえよう。ぬれぎぬも、そうして生れた言葉の一つであろうと思う。

恋はその生理に訴えるのが、もっとも強くなまなましい。しかし反面、生理の直接の表現は、言いくいし、歌言葉としては不適切という制約がある。ここに、なまなましい事柄を自然現象に託していう、という言い方が生れた。女は花にたとえられ、その花におく露は、濡れあう男女の世界であるという風に。ぬれぎぬの濡れは、恋の濡れであると同時に、自然のさまざまの表情へ雨、露、川水、田水、波……等を語る言葉である。自らの衣が濡れるその濡衣といえ、それは濡れる恋の所産である為、恋の表現として、相手をその生理においてとらえる一そのなまなましさをもっている。

恋の生理を、このように自然現象に托して表現する事は、言葉の雅やかさにおいて歌に適切というばかりではない。それは単なる自然現象とも、又恋の生理の表現とも、そのどちらにでも解釈出来るあいまいさをもっている。又托された自然現象は、どのような恋の生理の表現を托されているのか、いかようにも解釈出来るあいまいさももっている。このあいまいさへ①自然と恋。②恋のどんな生理は、贈答歌において重宝である。例えば①は、あなたは恋とおっしゃるが、私は単なる自然現象と違っておりました*。と相手の心をそらしたり、じらしたりする事が出来る。相手をじらすのも相手をとらえる方法の一つである。②は、男は

女を思って、波に濡れて泣いています、といい、女はそれに対し、あなたのおっしゃる濡衣は、涙の濡衣ではなく、あだし女と濡れた恋の濡衣でしよう、私などより、あの方の方がいいのでしよう*、とすねるような場合である。

ぬれぎぬは、その成立過程においてのべたように、その使用する立場によって、幾つもの用法をもち得る言葉であり、又恋の生理の表現でもある。故に、贈答歌における歌言葉としての資格を十分もつ。否むしろ、撰閲時代という特殊な男女贈答の時代が、なまなましさへ恋の生理と、雅やかさへ自然現象に托し得る」と、多岐の用法へ(1)させる(2)させられる(3)なき名をもつ「ぬれぎぬ」を生んだといえよう。万葉の時代のように、お互がお互の心を信じあえる素朴な恋の時代には、歌言葉もぬれぎぬのような多岐の用法をもつ必要がなかった。自然をよめば、それがそのまま恋の表明になったからである。恋が社交と化し、言葉でもって相手の心をどうとらえるかが競いあわれる、後宮サロンの花咲いた時代には、歌言葉もぬれぎぬのような二重三重の意味をにない得るものが求められたのである。

ぬれぎぬは、新統古今にのる源俊頼の歌を最後として歌の世界から姿を消す。ぬれぎぬを求めた後宮サロンの消滅と比例して、言葉も姿を消したものと思われる。ただ、ヌレゴロモという形で、それ以後の時代の歌に多くみえる。ヌレゴロモはヌレギヌと同様の事柄を意味するが、発音と音数を異にする。後の時代にあらわれたヌレゴロモの歌は、その殆んどがうき名に対する悔恨の歌である。ヌレギヌの歌のような生き生きした相手への働きかけを、それはもっていない。

行く年ををしまの蟹のぬれ衣かさねて袖に波やかからむ（新古今冬70⁴番、

『土御門内大臣の家にて海辺歳暮といへる心をよめる 藤原有家』

朽ちねただ潮くむ海士のぬれ衣恨みはてむと人にしらせむ

（統千載恋五156⁸番、『題しらず 権律師円世』）

撰関政治もその最盛期がおわると、後宮サロンは消滅する。男女の贈答の現実の地盤は消失したのである。その後、新古今歌風ともいうべき新しい恋歌はおこったが、それは文字通り恋歌であって、恋する現実の男女によって支えられた贈答歌ではない。それは俊成、定家といった歌よみたちによって支えられたいわば恋を詠んだ歌であり、机上で作られた歌である。かくして作られた恋歌は多く過去形の恋であり、恋の悔恨をうたう。恋人たちは恋に破れ、悲しみと悔恨に身をつつむのである。ぬれごろもにおける、四音から五音への音数の変化は、このうつりゆきをあらわすのであろうか。

最後の贈答歌については、筆を改めたいと思っている。

* よそにふる雨とこそきけ算東奈何をか人の恋路といふらむ（後撰集569番）

** 平中物語35段。p. 14 参照。